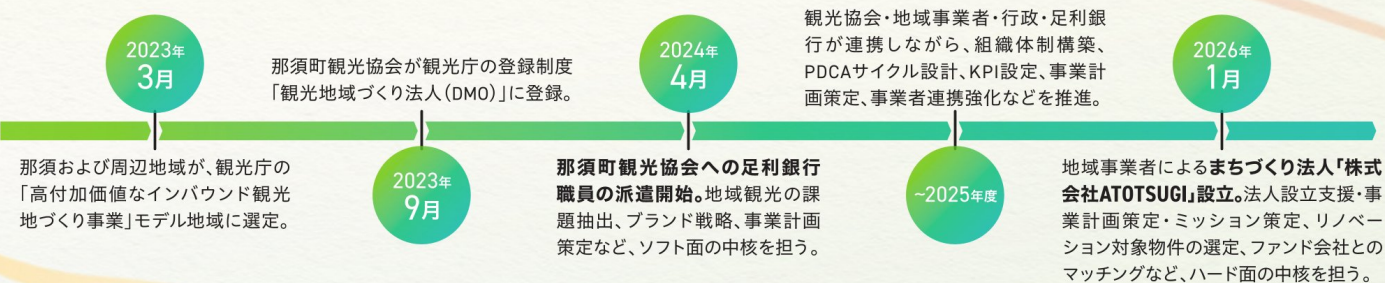


那須エリア観光地づくりの軌跡

地域観光の未来をつくる

那須の観光を、地域の力で次のステージへ。観光協会や地域事業者、行政、そして足利銀行などが強みをもち寄り、地域一体で進めてきた観光地づくり。その連携は新たな組織や仕組みへと発展し、地域が自ら考え、動く力へとつながっています。那須の未来を見据えた挑戦と、その歩みを振り返ります。

未来へつながる、挑戦の歩み



地域一体で進める観光地づくり

コロナ禍での観光需要の減少に加え、人口減少や後継ぎ不足による“観光の先細り”に強い危機感を感じていました。そんな中、那須エリアが観光庁の「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくり事業」のモデル地域に選定。地域の魅力を再構築し、持続可能な観光地経営へ転換するためには、地域一体で取り組む体制が不可欠でした。しかし、企画・調整・資料作成などのPDCAの運営を担う人材が不足していました。当初は人材派遣まで想定していませんでしたが、足利銀行に相談したことで久保田さんが加わりました。久保田さんが加わったことで、事務局機能は強化され、プロジェクトは大きく動き始めました。「ここまでできるんだ」というのが実感でした。

那須町観光協会
代表理事 阿久津 千陽

外部人材の力だけでなく、内部の成長という意味でも素晴らしい経験になった。



▲地域一体の観光地づくりに向け、議論を重ねる部会の様子

自走できる“事業”へ

派遣が決まった時は、正直どんな業務になるのか見えていませんでした。ただ、観光庁からの本事業への要求水準は高く、計画策定や関係者調整など幅広い業務が求められました。地域の未来を左右する重要な事業として、“絶対に成功させる”という覚悟で前線に立ち続けました。意識したのは、地域で自走できる組織をつくることです。ATOTSUGIも地域事業者で構成しました。もともと観光地としてのポテンシャルは高く、地域をより良くしたいという事業者さまの“想い”も強いエリアでした。そのため、私がすべて対応してしまうのではなく、「自走していくための、組織・体制・仕組みづくり」を目標に活動してきました。今回の派遣で学んだのは、多様な想いを持つ方々と『じっくり対話し、チームを一つにする』ことの大切さです。意見を擦り合わせながら着地点

を探るプロセスこそが、自走する組織づくりに不可欠だと身をもって学びました。銀行の仕事でも周囲を巻き込む力は欠かせません。今回学んだ『対話力・調整力』を武器に、栃木県のための地方創生推進に尽力していきます。



足利銀行 地域振興部
久保田 大輔

巻き込んだつもりが、巻き込まれた

事務局の歯車が一気に動き始めたことで、次のステップとして「まちづくり法人の設立」にも踏み出すことができました。久保田さんの仕事ぶりです。驚いたのは「キャッチアップの速さ」です。観光庁とのやり取りや地域の全体像を短期間で把握し、あっという間に先頭に立って現場を“ぶん回して”くれていました。それほど、久保田さんの推進力には目を見張るものがありました。「巻き込んだつもりが、巻き込まれた」という感覚がびったりでした。

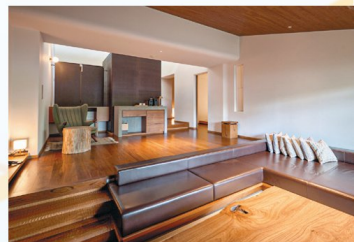
職員の成長も

久保田さんの仕事に対する姿勢や進め方に、職員も大きく影響を受けました。仕事の基準が引き上がり、組織の成長にもつながりました。



まちづくり法人
ATOTSUGI
代表取締役 片岡 孝夫

那須で生まれたこのモデルは、全国に展開できる。足利銀行と共に、地域の未来をもっと面白くしたい。



加速する那須ブランドの進化

5年計画のこのプロジェクトは、4年目を迎えた。足利銀行は、企画・組織づくりから、金融の力で那須地域の挑戦をさらに前進させてまいります。

まちづくりは次のステップへ